英語青年

THE RISING GENERATION

第152巻 / 第6号 (総号1891号)

平成18年9月1日発行　明治31年4月創刊

目　次

特集　ヘンリー・ジェイムズ

ヘンリー・ジェイムズの捜しもの ……折島　正司 322

ヘンリー・ジェイムズの「視点」 ……佐々木　徹 325

ヌスバウムのジェイムズ批評 ……平石　貴樹 328

どこからが超自然?——Henry James の短篇小説考 ……水野　尚之 331

『ボストニアンズ』に見るホモエロティックな読みの可能性 ……本合　陽 334

〈テロリストの身体〉のその後——『カサマシマ公爵夫人』の終わり方 ……竹村　和子 337

巨匠の郷愁——崩壊と再生——*The Finer Grain* (1910) の自伝的要素について ……市川美香子 341

● 特別記事

第4回国際構文理論学会開催記念

Charles J. Fillmore 教授に聞く ……聞き手・翻訳: 長谷川葉子 / 小原京子 354

● 連　載

英文法研究: 理論と事実の接点を求めて (6)——方言から言語理論へ(下) ……村杉　恵子 345

〈訳注式〉英語詩演習 (54): Henry Wadsworth Longfellow, 'Snow-Flakes'——静かに降りつむ白い象徴 ……澤入　要仁 360

医学と英文学 (6)——身体化された医学理論 [最終回] ……鈴木　晃仁 362

訳者と読むこの1冊——トマス・ディクソン・ジュニア『クー・クラックス・クラン　革命とロマンス』 ……奥田　暁代 370

辞典・事典の愉しみ (6)——語法辞典から学ぶこと ……浦田　和幸 372

● 海外新潮

WWW in the Seventeenth Century …川田　潤 349

淫靡な文学を語ろう ……中島　渉 349

ポウプと奴隷制 ……福本　宰之 350

モダニズムの諸相 ……余田　真也 351

正義なき「和解」の真実 ……溝口　昭子 352

教育的文体論を考える ……奥　聡一郎 352

● Book Review

新刊書架

河合祥一郎著『シェイクスピアの男と女』(「中公叢書」)(上野美子)——海老澤豊著『田園の詩神——十八世紀英国の農耕詩を読む』(笠原順路)——山口ヨシ子著『女詐欺師たちのアメリカ——19世紀女性作家とジャーナリズム』(進藤鈴子)——池内靖子・西成彦編『異郷の身体——テレサ・ハッキョン・チャをめぐって』(小林富久子)——小西友七編『現代英語語法辞典』(安藤貞雄) …… 365

英文解釈練習 ……行方　昭夫 374

和文英訳練習 ……上田明子 / Thomas F. Mader 376

CORNERS …… 353

片々録 …… 379

表紙について: セントアイヴズの画家たち (6) ……阿部公彦 359

Peter Lanyon, *Lost Mine* 1959, 182.8×152.4cm, 油彩、キャンバス。Tate, London 2006. ©Sheila Lanyon. 装丁: 広瀬亮平。

次号予告 …… 383

＊　今月は「リレー連載: 英語・英文学・英語学教育を考える」、'Eigo Club' は休載いたします。

リレー連載第6回　英文法研究：理論と事実の接点を求めて

村杉　恵子

方言から言語理論へ（下）

先月号では、補文標識のあらわれかたに関し、英語と関西方言に共通する事実とメカニズムについて概観した。今回は、名詞句内の補文標識のあらわれかたに関する事象について、「方言」が、言語理論研究に対して「言語」と同じように重要な経験的事実を提供する研究事例を紹介する。

英語の補文標識は、関係節の (1a) においては随意的に、一方 pure complex NP (純粋複合名詞句) の (1b) では義務的にあらわれる。[1)]

（1）a.　the cookie (that) Mary ate
　　b.　the fact *(that) John is smart

ところが、日本語では、英語と異なり、補文標識はあらわれてはならない。

（2）a.　花子が食べたスパゲッティ
　　b.　太郎が聡明である事実

この日英語の差はどのように分析されるのだろう。この問題の解決についても、方言研究は重要な鍵を与える。

人間言語の特徴として、分裂文と関係節は多くの共通点を示し、多くの言語において、両者は同じ音形の補文標識をもつ。英語では *that* がそれにあたる。

（3）a.　It is in Boston that I ate lobster for the first time.
　　b.　the fact that John is smart
　　c.　the cookie that Mary ate

(3a) は分裂文、(3b) は純粋複合名詞句、そして (3c) は関係節を含む複合名詞句である。一方、日本語（の大人の文法）においては、このパターンは見られない。

（4）a.　[ロブスターをはじめて食べたの] は、ボストンでだ
　　b.　[[シュークリームを作っている] におい]
　　c.　[[花子が焼いた] ケーキ]

(4a) の分裂文では補文標識「の」が義務的に顕在化するが、(4b) や (4c) のような複合名詞句には補文標識があらわれてはならない。すなわち、(5) のような例は非文法的である。

（5）a.　シュークリームを作っている(*の)におい
　　b.　花子が焼いた(*の)ケーキ

ところが、時制や（分裂文の）補文標識を獲得している日本語を母語とする幼児が、(6) や (7) のような過剰生成をすることがある。

（6）a.　シュークリームを作ってん(*の)匂い
　　b.　踊ってる(*の)シンデレラ
　　c.　トウモロコシ食べてる(*の)豚さん
　　d.　パパが書いた(*の)タコの絵
（7）a.　ちがう(*の)おうち
　　b.　あたらしい(*の)おうち
　　c.　意地悪な(*の)おばちゃん

日本語の大人の文法では、異なる要素が同一の音声表示「の」をもってあらわれる。(8) から (10) に示すように（代）名詞 (Noun)、属格 (Genitive Case marker)、補文標識 (Complementizer) が、東京方言においては「の」という同一の音声をもってあらわれる。

（8）代名詞の「の」
　　a.　赤いの（赤い物）
　　b.　母から届いたの（母から届いた物）
（9）属格の「の」
　　a.　僕の本　　b.　野蛮人の都市の破壊
　　c.　雨の日　　d.　母からの贈り物
（10）補文標識の「の」
　　ロブスターをはじめて食べたのはボストンでだ

これらの要素のうち、どれが (6) や (7) において過剰生成されているのか。また、その過剰生成の理由は、どのように理論的に説明されうるのか。これら二つは、関連はするものの独立した問いである。しかし、従来の研究においては、前者の問いに関心が集中し、後者に関する研究は少ない。本稿では、これら二つの問いについて、順番に考えていこう。

前者の「過剰生成される範疇」については、日

1)　*は当該の文が非文であることを示す。また *(...) とある場合には、括弧内の要素が随意的ではなく、義務的であることを意味する。

本語獲得研究の中で3つの仮説が提案されている。過剰生成される「の」が、(8)の名詞であるとする説（永野1960; Murasugi and Hashimoto 2004等）、(9)の属格であるとする説（Clancy 1985; 横山1990; 伊藤1998等）、そして(10)の補文標識であるとする仮説（Murasugi, 1991, 2000; Murasugi and Hashimoto 2004等）である。[2] Murasugi (1991)は、2歳中盤以降の年齢の被験者を主な対象とした実証研究と生成文法理論による分析に基づき、(6)や(7)のように過剰生成された「の」は(10)の補文標識であるとする仮説を提示しているが、その仮説を裏付ける重要な証拠が、方言研究から得られている。

Murasugi (1991)は、「の」は属格であるとする分析は、言語獲得中期から後期に見られる「の」の過剰生成に関しては正しいものでないとする。その根拠のひとつとして、富山方言話者の幼児から得られた事実を提示している。富山方言では、属格は「の」（僕の本）、一方代名詞や補文標識は(11)や(13)のように「が」であらわれる。[3]

(11) 代名詞の「の」
　a. 赤いが（赤い物）
　b. 母から届いたが（母から届いた物）
(12) 属格の「の」
　a. 僕の本　　b. 野蛮人の都市の破壊
　c. 雨の日　　d. 母からの贈り物
(13) 補文標識の「の」
　ロブスターをはじめて食べたがはボストンでだ

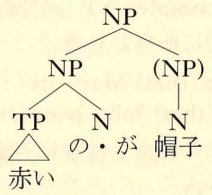
そして、富山方言話者の幼児は「の」ではなく「が」を過剰生成する。

(14) a. 赤い（*が）帽子
　　b. アンパンマンついとる（*が）コップ
　　(Murasugi 1991: 178)

もし(6)および(7)の過剰生成された「の」が属格助詞の「の」であれば、富山方言でも「の」であらわれるはずである。しかし実際には(14)に示すように「が」が過剰生成される。したがって関係節と主要部との間に過剰生成された「の」は属格助詞ではなく、名詞か補文標識であることが判明する。

では、過剰生成された要素は、名詞なのか。それとも補文標識なのか。(14a)を例に考えてみよう。もし名詞が過剰生成されたとすれば、「赤いが」は代名詞「が」（東京方言では「の」）を主要部とする名詞句となり、したがって、このとき子供が仮定する構造は、(15)のようなものであることになる。

(15)



一方、この過剰生成の時期に、子供は以下のような名詞句を産出する。

(16) a. ママのなまえ
　　b. お部屋のおかたづけ
　　c. お山のお花

すなわち、過剰生成の時期に、例えば(16a)のように、幼児は属格助詞「の」が名詞句（「ママ」）と主要部の名詞（「なまえ」）との間に挿入されなくてはならないことを知っていると考えられる。したがって、もし過剰生成された「の」あるいは「が」が名詞であるとすると、(15)においても、子供は、「の」あるいは「が」を主要部とする名詞句（「赤いが」）と、名詞（「帽子」）との間に属格助詞「の」を挿入し、(17)のような名詞句を産出することが予測される。

(17) 子供が(15)の構造をもつと仮定したときに予測される産出
　東京方言
　　a. [NP [NP [TP あたらしい] の] の　おうち]
　　b. [NP [NP [TP パパが書いた] の] の　タコの絵]
　富山方言
　　c. [NP [NP [TP 赤い] が] の　帽子]
　　d. [NP [NP [TP アンパンマンついとるが] の]　コップ]

しかし、このような形の発話は引き出されない。

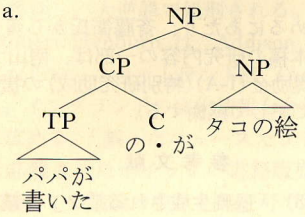
このことから、関係節と主要部との間に過剰生

2) Murasugi and Hashimoto (2004), 村杉・橋本(2006)では、縦断的研究から、言語獲得初期の段階（属格や補文標識がまだ獲得されていない時期）において、一見「の」の過剰生成と同じような「過剰生成」が観察されることを示し、「の」の「過剰生成」には、二種類あることを指摘している。初期（第一期）の「おおきいの、帽子」のような「の」については、永野(1960)の代名詞仮説のとおり名詞であるとする。一方、本稿で扱う過剰生成は、Murasugi and Hashimoto (2004)や村杉・橋本(2006)において第二期の過剰生成とされるものであり、それは補文標識である。

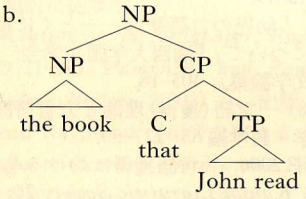
3) 本稿では、富山方言で「が」であらわれる部分と関連する以外については、東京方言の語彙で表記する。

成された範疇は、名詞ではなく、補文標識(東京方言では「の」、富山方言では「が」)であることになる。すなわち、(6)-(7) や (14) のような過剰生成を伴う名詞句の構造は、(18a) のようであると考えられる。この構造は、英語の関係節の構造である (18b) と比較してみると、語順が異なるだけで同じ構造である。

(18) a.



b.



すなわち、(6)-(7) や (14) のような過剰生成をしている子供は、(語順は日本語の大人の文法をもつが)英語と同じ複合名詞句の構造をもっていることになる。

このような議論をふまえ、Murasugi (1991, 2000) では、「なぜ過剰生成がおきるのか」という第二の問いに関して、以下のような理論的説明を提案している。日本語を母語とする幼児は、ある獲得段階で、日本語の関係節として、補文標識のある英語のような CP 構造を設定するというものである。

(1) と (2) の対比に見たように、複合名詞句における補文標識のあらわれ方は、日英語間で異なる。日本語の大人の文法では、英語とは異なり、補文標識(「の」)があらわれない。この違いは、二つの言語の複合名詞句構造の相違に起因する。英語型の関係節は、*that* (補文標識) を主要部とする CP 構造をもつ。一方、日本語型の関係節は、補文標識を主要部とする CP 構造ではなく、Tense (時制) を主要部とする TP 構造のようなものである。更に、(1b) と (2b) の対比に見られる純粋複合名詞句における補文標識のあらわれ方の違いこそが、いったん CP 構造のパラメター値を設定した幼児が、「の」の過剰生成からひきかえし、大人の「正用」である TP 構造へと移行する根拠となりうると考えられる。この提案は、子供の文法獲得において、構造に関するパラメターの再設定がありうることを示唆する。

この理論的仮説が正しければ、日本語(の大人の文法)と同じ特徴を担う他の「言語」を母語とする幼児も、日本語の幼児と同様の過剰生成を示すことが予測される。Murasugi (1991) は、富山方言と同様のパタンが韓国語にも観察されている事実を指摘している。韓国語の大人の文法で、属格は *uy*, そして、代名詞と補文標識は *ka* (*kes*) としてあらわれる。そして韓国語を母語とする幼児が、言語獲得の段階で、*ka* を過剰生成することが Kim (1987) において報告されている。

(19) Acessi otopai tha-nun (*ka)
uncle motorcycle ride Pres Comp
soli-ya
sound be
((This) is the sound that a man is riding a motorcycle.)
(Kim 1987: 90)

この事実は、上述した理論的説明が韓国語にもあてはまることを示唆する。

世界の言語の関係節構造には、(理論の変遷の中で、言い回しを変えたとしても) CP と TP のような二種類の構造が「パラメター」として存在するのだろう。そして、日本語や韓国語などの TP 関係節構造を母語とする子供は、自らの言語環境からは得ることのない CP 関係節構造を、「関係節としてありうる構造(パラメターの値)」として仮定する。親から与えられたこともないはずの英語型関係節を、生後数年の幼児が、自らの文法能力に基づいて生成する。そのとき、幼児は一様に、その主要部となる補文標識 (C) として、分裂文の補文標識の「の」(東京方言等)、「が」(富山方言等)、あるいは *ka* (*kes*) (韓国語) を顕在化するのである。

この関係節構造のパラメターに関する理論的仮説を導きだす上で、「方言」から得られる(大人と子供の文法に関する)事実は、「言語」と同じように重要な役割を果たしている。

以上、方言と「言語」が同じステイタスをもって言語(獲得)研究に貢献しうる点について、主に統語的な側面から概観した。同様の議論は、他の様々な言語現象においても成り立つ。例えば、直示的な動詞の代表的なものに *come* と *go* がある。

(20) Emily (2階にいる Jim に): The dinner is ready, Jim.
Jim: O.K. Thanks, Emily! I'm **coming**!

(20) では、Emily の呼びかけに応じ、Jim は食卓に向かう意思を伝えている。Jim の発話に注目しよう。英語では、聞き手 (Emily) を軸にして、話し手 (Jim) が聞き手に向かって「*come* (来る)」という表現を用いる。ところが日本語(東京方言)では、その逆である。「今、**行き**ますよ」として、話し手が聞き手に向かって「*go* (行く)」という表現を用いる。

では、この違いが、日英語の相違を示すのかといえば、そんな単純な話でもなさそうである。同状況で、富山方言や九州の一部の方言では、英語と同様に「来る (*come*)」という表現が用いられる。

(21) 恵美子: (2階にいる弘に) ごはん、できましたよ。お父さん。
弘 (富山方言話者): ありゃりゃ。そんがか。今、**来る**よ。

食事ができたと告げられた弘は「あらあら、そうなんですか。もうすぐ(食卓に)行きます」という文を産出する。このとき、富山方言では、「行く」ではなく「来る」という動詞を用いる。同様に、九州の一部の方言では、「ごはんのできたよ、お父さん」「あら、そうね。今、**来る**けん」となる。

ここで明らかとなる言語区分は、英語 vs. 日本語ではない。英語・富山方言・九州の一部の方言 vs. 東京方言である。このように、人間言語 (方言) がどのような「パラメター値」を選択するのかは、政治的な地域区分とは必ずしも一致しない。「言語」と「方言」は同じステイタスをもって、理論言語学に貢献しうるのである。

言語比較に基づく理論研究は、言語学において重要な位置を占めるが、多くの言語と日常的に接する機会の豊富な地域と比べて、日本にはなじまない分野であると思われるかもしれない。しかし、方言が言語と同じステイタスをもつことを考慮すれば、決してそうではないことは明らかであろう。日本はきわめて多くの方言を有する多方言国家なのである。

世界の言語約 6,760 語のうち、260 語余りを世界総人口の 96% が話し、6,000 語が 4% にも満たない人口に使用されていると言われている。また、その 4% にしか話されていない膨大な数の言語のうち、半数が 21 世紀中に消滅するであろうと言われている。この現象は言語のレベルにとどまらない。方言の平板化現象についてもまた、同様の危機は深刻である。この平板化の危機は、方言の記述にとどまらず、方言研究を言語理論の発展に結びつけていく必要性が、以前にもまして緊急であることを示唆している。

謝　辞

本稿をまとめるにあたり、斎藤衛氏から貴重な示唆を得た。また本稿の研究内容の一部は、南山大学 2006 年パッヘ研究奨励金 (I-A) (特別研究助成) の援助を受けている。ここに記して感謝する。

参考文献

伊藤友彦 (1998) 「過剰生成される「ノ」の統語カテゴリー——幼児一例の縦断研究」『東京学芸大学紀要』1 部門 49: 143–49.

永野賢 (1960) 「幼児の言語発達——とくに助詞「の」の習得過程について」『関西大学国文学会: 島田教授古稀記念国文学論集』: 405–18.

村杉恵子 (1998) 「言語 (獲得) 理論と方言研究」『アカデミア』文学・語学編 65: 227–59.

——・橋本知子 2006. 「言語獲得における名詞句内での過剰生成」*Kansai Linguistic Society* 26: 12–22.

横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1 (1): 2–9.

Clancy, Patricia M. (1985) "The Acquisition of Japanese." D. I. Slobin (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, vol. 1, 373–524. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Kim, Young-Joo (1987) "The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production." M. A. thesis, Harvard University.

Murasugi, Keiko (1991) *Noun phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition.* Doctoral Dissertation, University of Connecticut.

——. (2000) "Japanese Complex Noun Phrases and the Antisymmetry Theory." R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

—— and Tomoko Hashimoto (2004) "Two Different Types of Overgeneration of 'no' in Japanese Noun Phrases." Hang-Jin Yoon (ed.) *Proceedings of the 4th Glow in Asia 2003.* 327–50. Seoul, Korea: Hankook.

(南山大学教授)